

氏 名 (本 籍)	岡 松 恵 (大阪府)
学 位 の 種 類	博士 (学術)
学 位 記 番 号	博課第399号
学位授与年月日	平成21年 3 月24日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 人間文化研究科
論 文 題 目	江戸時代の小袖模様にも負の豊かさに関する研究
論文審査委員	(委員長) 教授 岩 崎 雅 美 准教授 西谷地 晴 美 教授 加 須 屋 誠 教授 大 谷 俊 太

論文内容の要旨

江戸時代の小袖模様には様々なものがみられる。そしてそれらの模様は、よりふさわしい表現となるように、種々の技法が駆使されている。そのような小袖は、当時も布が貴重であったことを再認識させるものであり、一領の重みを感じさせるものである。しかし少数ではあるが、恐ろしい模様や、悲劇に因んだ模様もみられる。吉祥模様が重用されるなか、何故不吉とも言える模様を、貴重な一領に描いて身にまとったのか、疑問が起ころ。しかしこの疑問は、従来の模様研究のなかでは見過ごされてきた経緯がある。

本研究ではこのような恐ろしい模様や悲劇の模様を「負」の模様と仮称し、研究対象としている。本研究で定義する負とは、勝ち負けという意味の負ではない。どちらかといえば minor という意味に近く用いている。つまり負の模様とは、模様全体からみれば少数であり、吉祥の観点に立つと周縁に位置づけされるものであり、仮に音楽の調べに喩えるならば裏コードである短調がふさわしいものである。資料としては、遺品や小袖模様を示したひいながたを用いている。構成とその概要は次のとおりである。

序章では、模様に関する先行研究を整理し、本研究の位置づけを試みている。

第1章では小野小町の模様をとりあげ、まず町方の小町の模様には、和歌の上手、絶世の美女といった小町像だけでなく、老女となった小町や、はては野ざらしとなった髑髏の小町を模様にしたものもみられる。これら模様は衰えや死に関わるため負の模様と言える。考察の結果、小袖模様から示された小町像とは、その和歌は、物語に譬えるなら『源氏物語』に匹敵する素晴らしいもので、美しい桜にも表現される。しかしまた小町の人生も、和歌を軸にした豊かなものであり、落ちぶれたり、老い

たりすることによって損なわれるものではない。老若男女を超えて共感する生き方と捉えられたと考える。また1章後半は、江戸時代後期の武家女性の御所解模様にみられる能楽「通小町」を暗示した模様をとりあげる。この模様を負とみなした理由は、この話が、深草少将と小野小町の悲恋を基にしていることに因る。しかも少将の恋は小町に拒絶され続ける一方的なもので、最終的には死に至るものである。

本論ではこの模様のモチーフの一つである車が、人の乗る部分（屋形）のない奇妙な形であることに注目する。考察の結果、屋形のない車は、強い意志を秘めながらも恋故に凋落した深草少将の象徴であり、またこのような車を模様を用いたことは、少将の恋のよさを認めていたと考える。

第2章では、三輪の神との婚姻譚である三輪の模様をとりあげる。この模様を負とした根拠は、三輪の神が杉や蛇の姿をしていることや、正体を知った途端、婚姻が破綻することに因る。「好きな人と結ばれ夫婦となって末長く幸せに暮らす」といった理想の結婚像とは異なるためである。本論では三輪の模様は、杉と苧環で表わされ、各々を詳細にみると、杉は群生に、苧環は糸をひいた状態に表されることに注目する。この伝説は、様々な文学にも取り入れられているので、それも参考にして考察した結果、杉の群生は三輪の神やご神木を表すのではなく、風景としての三輪山を表し、また苧環から引き出された糸は、「尋ねる恋」を暗示しているものであり、全体として三輪の模様は、娘の恋のひたむきさに共感した模様であると考え。

第3章は、南天模様を題材にしている。南天は「難を転ずる」という語呂合わせが定着している。一見ありがたように感じるが、一旦は難をこうむることを前提としている。つまり吉祥の意味する「曇りない招福」とは一線を画するものと考え、負の模様とみなす。本論では南天の模様を三種に大別する。第一は南天と手水鉢やぬれ縁といった庭の景物の組み合わせ模様である。これは魔よけに南天を植える習俗にもとづく意匠と考える。第二は南天と枕の組み合わせである。これは邯鄲の枕を表し、南天の「大きくなりにくい」という短所を、貴重なものとして捉える意匠と考える。第三は、南天と和歌の組み合わせである。組み合わせられる和歌は、「君が代」などの慶賀の和歌が多く、これに敢えて南天が組み合わせられている例もみられ、松竹梅にも代替可能な木であったことが考えられる。以上南天は、不浄な場所においては魔を退け、成長の遅さを却って貴重さに変え、冬にもしばまず却って美しい実をつける。このような「逆転の思想」が南天に含まれていると考える。

第4章では、婚礼道具などとして造られた具象模様が描かれた夜着を資料とし、特に獺の模様を中心に据えている。夜着の模様は、獺を含む獣を大きく恐ろしげに表現するため、負の模様としている。獺は、江戸時代の日本においては、悪夢を食べてくれる信仰があったが、伝説の本国である中国にはこのような俗信はなく、そのため獺の図像は一定せず、靈獣のようにも実在する珍獣のようにも表わされている。一方、江戸時代前期の夜着に描かれた獺は一貫して、強く恐ろしい威風堂々とした靈獣として背に大きく描かれている。大きく描くのは、模様の持つ吉祥性を着用者に与えるためであり、

恐ろしく描くのは、着用者を守護するためと考える。夜着の意匠は、寿ぎと守護の模様である。

結論では、負の模様を次のようにまとめている。まず負の模様の出現は、友禅染が発達し、模様表現の自由度が大幅に増し、ひいながたの出版も盛んとなり、模様に関する選択肢が増えたことに因る。また文学意匠が積極的に取り入れられた結果、深い意味や複雑な内容も模様で表現できるようになったことも大きな理由と考える。

模様は装飾の一手段であり、模様で衣服を飾ろうとする行為は、自分を美しく飾り、生活を豊かにしようとする心持ちに他ならない。なかでも吉祥模様は、着る人の幸せを願う模様である。一方、本論がとりあげた負の模様は、死や衰え、別れ、災難、恐れといったマイナスの状況や感情を含むものであり、見方によれば不吉な模様ともいえる。しかしこれらの模様の示す負の状況は、人が普通に生涯を送る上で、多かれ少なかれ、どの人にも訪れるものである。そのような状況となった時、人はどのように考えてきたか、どのように向き合ってきたかを示すものが負の模様であった。従来、人の一生における影の部分は、文学や芸能、または日常の様々な場面で語られてきたが、江戸時代ではそれが模様にも表され、多くの人々に着られるようになったのである。それは、これらの模様が、人間の本音や、人生の真実を衝いた模様であり、困難に直面する人や、不遇の人、失意の人にとっては、吉祥模様以上に心に響く模様であったためと思われる。ここに、模様の持つ負の豊かさがみられるのである。

論文審査の結果の要旨

服飾における文様は平安貴族の織物である有職文様をはじめ、中世から近世初期には絞染や刺繍による技法により少しずつ広がりを見せ、江戸時代の糊防染である友禅の流行において大きな展開を見た。もとより階級性や富裕性が関係するものの、人々が「晴れ」や「褻」の生活で用いる衣服に文様を施すことで四季の楽しみや教養を表現するというものである。

論文申請者は江戸時代の小袖模様の中から、従来研究対象にされている季節や吉祥文様ではなく、少数ではあるが恐ろしい動物や悲劇の物語に因んだ意匠に注目したのである。小袖やそれに類した夜着の模様に何故あえてこのような模様が選ばれたのかが研究の主題になっている。これらの文様は例が少ないうえに、従来の文様研究の中では見過ごされてきたものであり、それ故にこれらを総称する名称も生まれていない状況である。本論ではそのような模様を「負」の模様と仮称し、論を展開している。ここで述べられる「負」とは、勝ち負けという意味の負ではなく、どちらかといえばマイナー・minor（少数派）という意味での用い方である。生活の中で少し視野を広げれば、負の様子は、昼と夜、陽と陰（光と影）、喜びと悲しみ（喜劇と悲劇）、音楽の長調と短調というように相反して必ず起る現象であり、生活にめりはりや複雑さを加えて引き立てあっている概念である。以上のような点から、まずこの論文のテーマ設定の独自性が評価されるのである。

図に関係する資料として多く使用されているのは小袖や夜着の遺品、小袖模様を示したひいながたである。遺品の実物資料は文様表現の実例として貴重であるが、年代や着用者が特定されるものが少なく、資料としては難しい側面をもつ。一方ひいながたは年代が判明していること、僅かであるが装飾技術に関する解説があること、中には着用者の階級などが判明している点などが資料として優れている。このひいながたを多く資料とし得たことがこの研究の成果に繋がっている。また、関連する種々の和歌や謡曲などの文献史料は、文様の背景や主題になるため、その解釈に力が注がれている。

序章では、著名な文様研究者が、武家女性の御所解模様に寿福でない謡曲が模様になっている、と記述していることに着目し、本研究の出発点になったことを述べている。

第1章では小野小町の模様を取りあげ、町方の小町の模様には、和歌の上手、絶世の美女といった小町像だけでなく、老女、はては野ざらしとなった髑髏の小町まであることを見出し、最後の姿まで見届けようとする人々の関心と和歌に対する評価を考察している。また1章後半は、江戸時代後期の武家女性の御所解模様にみられる能楽「通小町」を暗示した模様を取り上げている。この模様のモチーフの一つである車が、人の乗る部分（屋形）のない奇妙な形であることに注目し、屋形のない車は、強い意志を秘めながらも恋故に凋落した深草少将の象徴であると考察している。誠実に物事を実行し

ている人の行為の表現が浮き彫りにされた模様であるが、一種教育的要素も考えられる。関連する小町像や史料の読み下しに若干の読み違いが認められるが、多くの史料を駆使してこの物語の中心課題を探ろうとした試みは評価できるものである。

第2章では、三輪の神との婚姻譚である三輪の模様をとりあげ、この模様を負とした根拠に三輪の神が杉や蛇の姿をしていることや、正体を知った途端に婚姻が破綻することに因るとし、模様は杉と苧環で表現されていると述べている。杉の群生は三輪の神やご神木を表すのではなく、風景としての三輪山を表し、また苧環から引き出された糸は、「尋ねる恋」を暗示しているのであり、全体として三輪の模様は、娘の恋のひたむきさに共感した模様であると考察している。三輪山についての記述は古く『古事記』『日本書紀』に神話があるが、この書物が一般の人の目に触れることは考えにくく、『伊勢物語』に収蔵されている和歌が広く流布したという考察は自然である。苧環模様は七夕模様や歌舞伎の「京鹿子娘道成寺」などにもみられ、女性のひたむきさを表現した模様として一般化し定着している。

第3章は南天模様で、南天は「難を転ずる」という語呂合わせが定着しているが、一旦は難をこうむることを前提としている。本論では南天の模様を三種に大別し、第一は南天と手水鉢やぬれ縁といった庭の景物の組み合わせ模様で、これは魔よけに南天を植える習俗にもとづく意匠である。第二は南天と枕の組合せで、これは邯鄲の枕を表し、南天の成長が遅い短所を、貴重なものと捉える意匠と考えている。第三は、南天と和歌の組合せで、「君が代」などの慶賀の和歌が多く、これは吉祥である。これらのことから南天は、不浄な場所においては魔を退け、成長の遅さを却って貴重とし、冬にも美しい実をつけるという「逆転の思想」を南天に見出しているが、負の模様と断定するにはもう少し考察が必要と思われる。

第4章では夜着を資料とし、特に獏を代表とする大きく恐ろしい模様に着目している。獏は、江戸時代の日本においては、悪夢を食べてくれる信仰があったが、伝説の老家である中国にはこのような俗信はなく、そのため獏の図像は一定せず、靈獣や珍獣のようにも表わされている。一方、江戸時代前期の夜着に描かれた獏は一貫して、強く恐ろしい威風堂々とした靈獣として背に大きく描かれている。大きく描くのは、夜に着用者を守護するためと考察しているが、これを立証する資料が乏しいのが惜まれる。

結論として、小袖等における負の模様の出現は、友禅染が発達して模様表現の自由度が増し、ひいたがたの出版も盛んとなり、模様に関する選択肢が増えたことに因ること、また文学が大いに好まれ、深い意味や寿福でない内容にまで模様表現が拡大したこと等を挙げている。文学がこのように服飾文様に表現されたことは、日本の服飾の大いなる特徴といえるもので、負の文様研究はこの分野に一層深みを加えたと評価できるものである。

本論文の主要な部分は服飾美学会・服飾文化学会等で発表された後、以下の学会誌等に掲載されて

いる。第一章：「御所解文様にみる『通小町』の表現―屋形のない車の文様を中心に―」『服飾文化学会誌』(Vol. 8, No. 1, 2008)、第二章：「小袖にみる杉と苧環の模様」『服飾文化学会誌』(Vol. 9, No. 1, 2009)、第三章：「小袖類にみる南天の文様」『人間文化研究科年報』(奈良女子大学大学院、No. 23, 2008)、第四章：「夜着における猿文様―万治から元禄期の小袖模様雛形本を資料にして―」『服飾美学』(服飾美学会 No.45, 2007)「夜着の文様―万治から元禄の小袖模様雛形本を資料として―」『家政学研究』(奈良女子大学家政学会 Vol.55, No. 1, 2008)。

よって、本学位論文は、奈良女子大学博士(学術)の学位を授与されるに十分な内容を有していると判断した。